

# 「平成23年度鳥取県教育センタースーパーバイザー事業報告書」

八頭町立船岡中学校

## 1 スーパーバイザー

ノートルダム清心女子大学 准教授 大滝一登

## 2 本校研究テーマとテーマ設定の理由

### (1) 研究テーマ

「学ぶ意欲を引き出す授業の工夫」  
～習得・活用・探究型の授業づくりとそれを支える言語活動の推進～

### (2) テーマ設定の理由

本校の生徒は、基本的な学習内容の習得は概ね良好な状況にあるものの、それらを活用して主体的に考えたり表現したりする力や学ぶ意欲に課題があることが諸調査の結果から明らかになっている。そこで、平成22年度は、「学ぶ意欲を引き出す授業の工夫～習得・活用・探究型の授業づくりと効果的な支援のあり方～」という研究テーマのもと、習得・活用・探究型の授業を構築して生徒の学ぶ意欲を引き出すことをめざした授業改善に取り組むこととした。その取りかかりとして、全教科で言語活動の充実を図ることに視点を置き研究活動に取り組んだ。その結果、言語活動を取り入れた授業改善の兆しが見られるようにはなってきたが、多くの教員にとって、具体的な取り組みについてはまだまだ暗中模索といったところであった。

そこで、平成23年度は、より実践的で焦点化した取り組みを推進するために、研究テーマは継続するものの、サブテーマを「～習得・活用・探究型の授業づくりとそれを支える言語活動の推進～」とし、言語活動の充実に焦点を絞った研究に取り組むこととした。さらに、教育センターのスーパーバイザー事業を受け、大滝一登先生（ノートルダム清心女子大学准教授）を迎えてその指導を仰ぎながら研究を進めていくこととなった。

言語活動の充実については、昨年度は全教科が同じレベルで取り組むことを基本としていたが、事業の開始にあたり、大滝先生に昨年度の本校研究紀要「教育実践のまとめ」を見ていただいた。その際「船岡中学校は国語科も他教科と同じ1教科として取り組んでいるが、本来、言語活動の充実には国語科が言語能力をきちんと伸ばさなければ他教科で言語活動をいくら取り入れても十分なものにはならない。他教科で言語活動が有効な手段となるよう生徒の言語能力（スキルを含む）を国語科で高めておく、またそのことを他教科が具体的に理解しておくことが重要である。」という助言をいただいたことを踏まえ、本年度は国語科を中核とした校内連携という視点も持ちながら研究に取り組んできた。

## 3 研究の経過（下線部がスーパーバイザーに指導助言を受けた研究活動）

月 日	活 動 内 容
4月19日	教育センタースーパーバイザーによる学校教育支援事業実施決定
27日	職員会「研究テーマ等の決定」
5月13日	<u>第1回校内研究会</u> 大滝先生による授業参観と講義 「言語活動の充実を視点とする授業改善のあり方」
6月7日	<u>研究授業事前指導</u>

15日	<u>言語活動に関する取り組みの教師用事前アンケートの実施</u>
23日	<u>第2回校内研究会（授業研究会）</u> 国語科1年「クジラたちの声」 授業者 村田耕一 指導助言 大滝一登 准教授
28日	学習に関する生徒アンケート実施
8月20日	<u>スーパーバイザー事業発表会</u> 「中学校の各教科における言語活動の充実」実践校報告 岸田裕一
24日	職員研修 ○教育課程研究集会報告 ○校区授業研究会に向けて（ <u>学習指導案の形式の検討</u> ）
9月20日	<u>第3回校内研究会</u> ○言語活動の充実に向けた各教科の取り組み確認 ○校内授業研究会に向けた最終確認（単元、学習指導案の確認） ○ <u>国語科言語活動一覧表の作成（スキルを中心に）</u>
10月20日	<u>第4回校内研究会（船岡中学校区小中授業研究会）</u> ①全クラス公開 1年（英語） 2年（音楽、数学） 3年（理科、国語） 3組（生活単元） ②講演及び指導助言 「言語活動の充実をめざした授業改善のあり方」 ～小中連携の視点で～ 大滝一登 准教授 ③演習「小中交流グループ討議」
12月 5日	授業公開週間～13日 ○すべての教員によるミニ授業研の実施
16日	生徒授業アンケート ○生徒が各授業を4観点で4段階評価
2月 1日	<u>第5回校内研究会（授業研究会）</u> ○道徳2年2組「きまりの遵守」 授業者 西村公秀 指導助言 八頭町教育委員会 谷口達哉 指導主事
3月	○本年度の研究のまとめ「教育実践のまとめ作成」

#### 4 スーパーバイザーによる指導の経過と指導内容

##### (1) 校内研究会での講義(5月23日)

演題「言語活動の充実を視点とする授業改善のあり方」

5校時の授業を参観していただいた上で、上記演題で次のような講義を受けた。

- ・言語活動の充実が重要となる背景と言語活動の充実に向けた方策等について
- ・国語科が中核となって言語活動に取り組む意味と国語科で培った言語能力をもとに各教科で言語活動を充実させる上での留意点
- ・国語科で行っている言語活動が他教科にわかるような取り組みが必要 等。

##### (2) 第2回校内研究会に向けての事前の指導（6月7日）

第2回校内研究会に向けて、授業者である村田と研究主任の岸田がノートルダム清心女子大学を訪問。指導案の内容や授業の展開など大滝先生から細かい指導をいただいた。それを受けて、研究授業で扱う説明文「クジラたちの声」と「クジラたちの飲み水」という別の説明文との比較読みを試みることにした。

##### (3) 言語活動に関する取り組みの教師用事前アンケートの実施（6月15日）

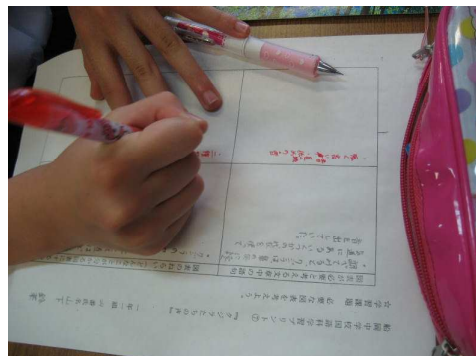
研究を次の段階に進めるために、教師の言語活動に関する知識・理解等の共有化を図ることが重要との観点から、アンケートをするように指導を受けた。アンケートは次の

項目で実施し、第2回校内研究会で共通理解を図った。

- ・教科でどのような言語活動が推奨され、どのような言語活動を行ってきたか
- ・その言語活動を行うために身につけてほしい言語能力
- ・国語科の行っている言語活動で知らないこと、知りたいこと
- ・国語科の言語活動の指導以外に克服しなければならない課題

#### (4) 第2回校内研究会（6月23日）

このような指導を受けて、1年生で国語科の研究授業を実施した。また、「クジラたちの飲み水」には本文と関連した図表が多く使われていることを参考に、本時では図表が使われていない「クジラたちの声」に必要な図表を考えて発表するという授業を試みた。研究会では国語科のこのような試行を受けて各教科でどのような言語活動ができるかを考えた。今回の研究会を通して、次のような言語活動の取り組みに関する方向性が見えてきた。



自分の考えをまとめる様子

- ・国語科は言語能力育成の中核教科となれるよう具体的な取り組みを進めていく。
- ・国語科以外の言語活動は指導目標の実現のための一手段なので、知識・技能の活用としての言語活動を考える。
- ・国語科、他教科で言語活動に関するカリキュラム・マネジメントプランを作成する。
- ・言語活動に関して校内で共通して具体的に取り組むことを設定する。

#### (5) 言語活動の充実に向けた各教科(担当)の取り組み

各教科(担当)で活用型の授業づくりに向けた言語活動の具体的な取り組みと、その言語活動でつきたい教科の力や目指す生徒の姿の一覧を作成して、校区授業研究会に向けた授業実践を進めた。

#### (6) 学習指導案の工夫

「本時目標」に「言語活動の位置づけ」を併記した。本時にどのような言語活動を行うか、その言語活動でどのような教科の力をつけようと意図しているかがわかるようにした。また、学習過程の中の言語活動を□で囲み、本時のどこで言語活動が行われるかがわかるようにした。

#### (7) 船岡中学校区小中授業研究会（10月20日）

今回の授業研究会には2つの意味がある。一つは本校の研究テーマである言語活動を充実して活用型の授業をつくること、もう一つは校区の小学校と連携して言語活動や学力向上を進めることである。大滝先生の指導を受けて、次のように研究会を実施した。

##### ①公開授業

全クラス公開とした。1年は英語、2年は数学と音楽、3年は国語と理科、特別支援学級は生活単元の授業でそれぞれ言語活動を活用した授業を行った。授業は校区の小学校とスクラム教育推進事業で連携している八頭高校が参観した。この公開授業には、船岡中学校を仲介として小・中、中・高の授業連携を図るねらいもある。

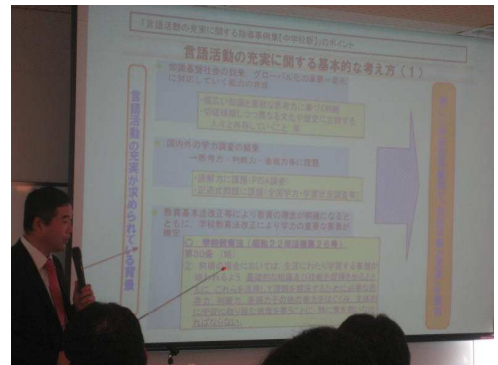


1年英語の授業風景

## ②全体会

校区の各小中学校の言語活動の取り組みを中心に実践報告をして共通理解を図った。その後、「言語活動の充実をめざした授業改善のあり方～小中連携の視点で～」という演題で大滝先生に講義を受けた。その中で、

- ・子どもから見れば、小学校から中学校と学習は連続している。義務教育は一括りだということを意識して、一貫性のある指導を行うことが大事である。
- ・文科省の「言語活動の充実に関する指導事例集」を小中につなげてみれば、小中連携が具体的に見えてくるのではないか。同じ言語活動でも発達による違いや目標による違いがはっきりしてくるのではないか。
- ・指導の成果と課題を共有することなど小中をどうつないでいくかが今後の課題になる。というような指導を受けた。



大滝先生の講義の様子

## ③小中交流グループ討議

その後、演習として小中の4人グループで参加者交流シートをもとに討議（交流）を行った。交流シートには、「言語活動の充実に向けた自校や私のこれまでの取り組み」と「学力向上に関して他校種と連携するメリットと考える点」を事前に記入してもらい、その内容をもとに話し合いを進めた。

さらに、「他校種と連携する上でのハードルと考える点」、「他校種の先生に尋ねたいこと」を記入して討議を深めていった。今後とも小中の話し合いをしたいとか小中の教科会を持って連携を深めていきたいというような前向きな感想が多く見られた。



小中交流グループ討議の様子

## 5 成果と課題

大滝先生の指導を受け、国語科を中核とした言語活動の充実という研究実践を推進することができた。国語の授業研究会では、国語科の言語活動や言語の指導に対する理解を深めることができた。さらに「国語科言語活動一覧表（スキルを中心に）」を作成することにより、3年間を通してどのような言語活動がいつ頃されているかを共通理解することもできた。この国語科の一覧表を意識して、各教科で言語活動を充実することには一定の成果があったと考える。また、校区の授業研究会では言語活動の指導について、小中の共通実践及び小中が連携して取り組むことの重要性を理解することができた。

しかしながら、教科によって目標や取り組みたい言語活動が異なるため、学校全体で共通の言語活動を推進していくことについては不十分だった点もある。新学習指導要領の全面実施を前に、学校体制で言語活動を充実させる取り組みを進めたことには意義があったが、平成24年度は、より具体的、効果的な実践へ深められるように研究を進めていきたい。